

フレーベルへの誘い

新 海 英 行

本稿はカール・ギュンター他編『ドイツ教育史』国民と学問・出版、1967年、(K. Günther, F. Hofmann, G. Hohendorf, H. König, H. Schaffenhauer (hrsg), *Geschichte der Erziehung*, Volk und Wissen Volkseigener Verlag Berlin, 1965)におけるフリードリッヒ・フレーベルのついでにの論述の日本語訳である。本書は、ドイツ民主共和国(DDR)において教育学者の総力を挙げてまとめられたドイツ教育史(乳幼児教育から成人教育に至るまで)を概説した大著である。本書は、1968年、大学院に入学した筆者にとって教育学研究のあり方を導いてくれた貴重な入門書の一つであった。本稿の主題に「フレーベルへの誘い」としたのも「筆者自身への誘い」という意味からである。1982年に日本教育学会の招きでギュンター氏が来日し、研究大会において特別講演を行った。さらに同氏は広島に向かう途中で名古屋にも立ち寄られたので、この機会にDDRの教育改革について身近にお話をうかがうことができた。そんなことが筆者には本書とギュンター氏への親近感をいっそう抱かせることとなった。このように、本書は筆者を教育学研究を動機づけてくれた記念すべき著書であるので、本学の最終講義(2016年3月1日)においてテキストに取り上げさせていただいた。なお、訳文中の[]内の注釈は訳者の記述である。文末には、フレーベルへの理解を深める上で参考になる最近の研究例の一部を記載した。

ペスタロッチとの出会いと幼稚園の発見

幼・青少年期

フリードリッヒ・ビルヘルム・アウグスト・フレーベル(Friedrich Wilhelm August Fröbel)は、1782年4月21日、オーベルバイスバッハの、身体によく効く軟膏薬と鎮痛剤の生産と販売で有名なチューリンゲンの小さな村に生まれた。彼の父は牧師であり、活発に活動し、村の人たちの経済的安定のために配慮する人であった。フリードリッヒが誕生してまもなく母が他界した[1783年]。父の牧師という職業上の必要性から自分の子どもたちにだけ愛情を注ぐわけにはいかなかったし、また、青少年時代に母の温かさや愛情を失ったことがフリードリッヒをだれとも親しく交わらない、自分のうちにこもる孤独な人にしてしまった。フレーベルは2年間森林管理の仕事に就いたのち、1799年にイエナ大学哲学部に入学し、とりわけ自然科学の勉強に没頭した。

まもなくして経済的な理由で勉学を中断し、実際的な仕事に就かなければいけなくなつた。その後、彼は時々住所と職業を変えた。疾風怒濤のこの時代にあつて、ロマン主義的な影響が彼に襲いかかった（シェリングの著作、ノヴァーリスの詩）[青木]。1805年初め、将来役に立つことになる安定した仕事を見つけた。それは模範学校での仕事であつた。同校はペスタロッチの教育理論にもとづいて教える学校であり、フランクフルトの市民が将来つくる基礎学校の模範として開校された学校であつた。彼はこの学校の教師となつたのである。

ペスタロッチ学派

同じ年に、フレーベルはペスタロッチ（Pestalozzi）を訪ねた。最初に訪問したときは、フレーベルはフランクフルトの学校の子どもたちの身体的な健康づくりのために、遊びや体操や徒歩学習を導入しようとしていた。イフェルテンでの2回目の訪問はもっと長い滞在となつた。同地では、2人の子どもたちの家庭教師として教え、また学び、2年を過ごした（1808～1810年）。

フレーベルは、さらに郷里でもペスタロッチの考えをモデルに学校制度を改革したいと思つた。まずは、彼はシュワルツブルク＝カールシュタットの領主に詳細な書簡を書き送つた。そして、ペスタロッチ基礎学校の設立のために働こうと考えた。しかし、こうした試みは無駄であつた。なぜならば、ほとんどまったくと言ってよいくらい産業化されていなかったこの地方の支配者たちは地方の人々のしっかりした教育にはまったく興味がなかつたからである。

民族主義的な情感の形成と普遍的なドイツ教育機関

フレーベルの民族主義的な情感が発展し、完成する上で、決定的であつたのは、解放戦争（対ナポレオン）[1813～1814年]であつた。1811年、彼は、ナポレオンに対する抵抗運動の拠点、ベルリンに学生として滞在した〔学生組合に所属〕。同じ年、彼は義勇兵としてこの運動に参加した。この決定的な年を振り返って彼はこう書いている。

「私の働きは民族主義へと向かつた」と述べたうえで、「祖国を血と命で守りきれなかつた若者がはたして子どもたちの教師になれるのだろうか」、そのようなことは「私にはまったく考えられなかつた」⁽¹⁾

この時からフレーベルの教育学は明らかに民族主義的な色彩を帯びることとなった。しかし、民族的な問題でドイツ諸侯の裏切り行為がもたらした失望は、彼にドイツ統一国家への夢を思いとどまらせた。

1816年、フレーベルはチューリンゲンの小さな村グリースハイムに郷土学校(Heimschule)を開校した。翌年、同校はカイルハウ(Keilhau)に移された。彼はこの学校を「一般ドイツ学校」と名付け、また愛国主義の芽が育つ植物園ととらえた。この学校はイエナ学生組合と手を結んだ。1815年からはフレーベルの最も親しい協働者はリュウツオウの愛国主義者たちであった。授業はペスタロッチの原理に従った。目標は「自由で、自立し、考える人」であった。メッテルニヒ反動時代において「デマゴグたちの巣窟」というレッテルをはられ、「革命精神の温床」と敵視された。1851年、フレーベルは反動勢力の目をカイルハウからそらしたいと思い、ドイツを跡にした。自分の考えにとって好都合な条件のもとにいれば、外国でも十分な仕事ができるはずだと思ったからである。

スイスで学校を設置

カイルハウの学校が協働者によって一時的ではあれ存続している間に、フレーベルはスイスでペスタロッチの考えによる新しい学校づくりに努力した。スイスのカントン州ルーツェルン政府のリベラルな人びとは彼への十分な支持を確約した。彼らはフレーベルをペスタロッチの教育の後継者とみなしたからであった。とはいえ、彼の努力の十分な成果は－ヴィリザウでもヴァルテンゼーでも－実現しなかった。なぜならば、ギリシャ正教の聖教者たちが宗教的に寛容な教育者(フレーベル)に敵意を抱き、彼らの影響力を駆使して子どもたちがたくさん集まらないように邪魔をしたからであった。

したがって、学校の経済的収益は保障されなかった。フレーベルは、ペスタロッチが孤児院の指導を請け負うために働いたブルクドルフ(Burgdorf) [フレーベルの甥] への呼びかけに従った。政府の任命を受け、彼は校長向けの研修講座を実施した。

幼稚園の創設

ブルクドルフの孤児院長として身に付けた経験は、彼に幼児教育の問題に向き合おうという決断をさせた。彼の最も親しい協働者、ヨハン・バロック(Johann Barok) [フレーベルの甥] は次のように記している。

「彼自身の経験と教師たちの記録から新たに次のことを確信した。もし家庭教育の改革を視野に入れず、ちゃんとした指導もされていないとすれば、適切で大切な基本的なことがらについて学ぶ学校教育がないわけにはいかない、と。彼の言う心の教育のためには賢い母親たちの教育が必要となる。そして、最も早期の教育の重要性が彼にとっては何よりも有意義なことであった。彼は、自らの教育思想は多くの困難な事情で十分に実現できなかつたけれど、少なくとも、幼い子どもたちと向き合い、自分の思想とその実現を女性たちの世界に届けることにしようと決心した」⁽²⁾

フレーベルは郷里に帰り、よりよい就学前教育の実際的指導のために、遊びと活動の道具についての最も適切な体系—次に続くあらゆる陶冶と訓育に備える上で—をつくる仕事に着手した。彼はカイルハウからそれほど遠くないブランデンブルクにおいて「子ども・若者の活動本能を指導する学校」を創設した。そこでは、フレーベル流の「遊びの恩物」がつくられ、それを多くの人々に送った。多少改善されてはいるけれど、今なおそれらのうちのいくつかの恩物は就学前教育の場で使われている。さらにフレーベルは、ブランデンブルクの近郊の子どもたちと一緒に「遊びサークル」をつくり、遊びの恩物と行動遊びをテストし、さらなる改善をした。彼は新聞広告をし、新聞やパンフレットで自分の考えを公けにした。やがて彼は他の地域でもこうした「遊びサークルが生まれるに違いないことを確信した。フレーベルは「遊びの指導者」を養成することによって適切な指導者の不足を取り除こうとした。最初の講座には男の子たちのほかに少数の女の子も参加した。やがてフレーベルは、就学前教育という任務を遂行するうえで女性に特有の適性に気づき、「遊びの指導者」の活動—のちに次のように命名—「幼稚園の女教師」の活動のために若い女教師の数を増やした。

1840年は、フレーベルの「幼稚園」—彼は就学前教育の新たな概念をこう命名した—創設の年である。フレーベルの努力は特定の社会層の要求に対応するものであったので、彼は比較的速やかに多数の支持者を得た。

ドイツ中のあらゆる地域に新しい幼稚園がつくられ、既存のさまざまな「幼児学校や子守り学校」がフレーベル方式に倣って再編成された。フレーベルが「自由ドイツ国民の春の朝」と感激して迎えたドイツ市民革命は、彼の活動に一層強力な援助を与えた。ドイツの民衆学校の教師たちは大きな集会を開くなど、就学前教育問題に取り組み始めた。フランクフルトの中央当局〔国民議会〕への決議や請願の中には、法律の制定にあたって当然

幼稚園を考慮に入れるべきだという要求が含まれていた。

プロイセンの幼稚園禁止令

革命の敗北に続いて、民衆のあらゆる民主主義的な活動が抑圧された。1850年に「一般ドイツ教員協会」の禁止と同時に、進歩的教員団体も禁止されるなど、最も強力な組織が解体され、1851年には幼稚園までもが反動勢力の犠牲となった。プロイセン政府は次のような見えすいた、不当な理由で幼稚園を禁止した。

「カール・フレーベル（フリードリッヒ・フレーベルの甥）による『女子高校と幼稚園』という冊子が示しているように、幼稚園は子どもたちに無神論を教えるフレーベル的な社会主義の一環に位置づいている。それゆえ、フレーベルの理論ないし同様の考え方にもとづいた学校や教育施設はプロイセンでは許可することはありえない」⁽³⁾

幼稚園禁止令はプロイセンに始まり、他の領邦にも広がった。これは、フレーベルの活動にとって大きな痛手であったので、あげくは年老いた教育者の命を奪うこととなった。彼は、1852年7月21日に亡くなった。それまではブランデンブルクの近くのシュレースヘン・アテリエントールの幼稚園女教員研修所で指導した。

フリードリッヒ・フレーベルの教育観と教育実践

ペスタロッチの教育的見解との関係

フレーベルはペスタロッチの教育観に強く影響されている。1809年4月、シュバルブルク・ルドルフシュタット領主に宛て提出したフレーベルの報告書は、彼がペスタロッチの教育実践から得た深い認識を見事に証左している。フレーベルは、ペスタロッチを人間の諸力の全面発達のために尽力した教育者と理解していた。彼は次のように書いている。

「人間は、身体、心、精神という3つの主要な力の集合体である。これらを調和的に等しく全体に育て上げること、これが彼の人間の概念規定である。それゆえに、彼（ペスタロッチ）は全体性の考えに従って人間の身体、心、精神の本質としての素質を要求し、それにもとづいて素質の全体性の中で調和的な発達と教育が成立する。こうして人間の全体性が生起し、行動に移る。したがって、ペスタロッチは、身体的発達と

しての発達だけでなく、心とその発達・・・あるいは恐らくは身体（と心）が結びつくだけではなく、身体と精神と心の合一を人間の発達ととらえ、素質の全体性のもとで人びとに働きかけた。・・・」⁽⁴⁾

フレーベルはまた、ペスタロッチの基礎的方法論における教育観と教育原理こそ重要だと認識した。彼はこう言う。

「人間はただ一人で世界に実在しているのではない。すべての外界が人間の認識の対象であり、(外界の認識は)人間の発達と教育の手段である。ペスタロッチもまた、われわれにこう言おうとしたし、事実このように言った。君たちにはすでに述べたように、子どもの段階的な発達過程において人々に順次自覚的な直観や認識の力が育まれるし、外界がどのような対象であれ、そのような直感や認識の力をもたらしてくれる」⁽⁵⁾

フレーベルの著書や理論的論文ではわれわれは－とくにこれら2つの問題について－ペスタロッチの思想に再三出会う。のちにフレーベルはイフェルテンの学校を批判して次のように述べた。教授計画による授業実践はペスタロッチの主張する諸能力の全面発達理論が十分に理解されていない、と。とは言え、フレーベルは遊びの恩物を発展させるにあたって、疑いなくペスタロッチに教えられた観察・直観理論に導かれた。

ペスタロッチ同様、フレーベルの場合も（その教育論には）社会的な思考と行動という特色が見いだされる。フレーベルも教育によって貧民の実態を改善するものと考え、シュヴァルツールトルシュタットの学校制度の改革の努力はとくにこの視点で取り組まれた。ディースターヴェークは彼をバード・リーベンシュタインの「子どもの友」と呼んだ。フレーベルは愛情と熱意をもって貧しくボロボロの服をまとった村の子どもたちの教育に専念したからである。ペスタロッチ同様、フレーベルの場合も、古くて動きのない社会構造に固執し、社会の発展をむしろ妨げる思想が見いだされる。フレーベルは、ペスタロッチの思想に含まれる保守思想について言及しているが、それはフレーベルの反革命的で改良主義的な考え方の特徴でもある。1809年、フレーベルは郷里のイフェルテンから次のように書いている。

「スタロッチの教育方法は子どもたちを注意深い自然の観察へと導き、彼を静かにさせ、落ち着かせる。そして自分自身と自分の本質を考えさせ、彼の尊厳への認識に導き、こうして自己の尊厳と他者への尊厳に導く。ペスタロッチの教育方法は、同時に自己の不完全さを認識させ、人間愛と他者との相互理解へと導く。青年や成人の場合には、自立性、おかれた状況への満足、職業への誠実さ、及び家族の幸せへと導く」⁽⁶⁾

フレーベルは、のちに明らかに階級調和という反動的な考え方を「生の合一」(Lebens-Einigung) という理念と表現している。

フレーベルの教育理念は、多くの点で根拠を欠いている。それは、幼児教育の創造性という点では評価できるが、彼の師、ペスタロッチもそうであるが、教育科学の進歩にとっての意義という点ではそれほど高く評価できない。フィヒテやシェリングの哲学やロマン主義的な価値観に影響されたフレーベルの世界観 [青木]、またフレーベル特有の小市民的な狭隘なものの見方は彼の教育的働きの限界を示している。この限界にもかかわらずフレーベルの教育思想－彼の教育実践も同様であるが－は、この時代の社会的制約のもとで一定の進歩に貢献した。例えば、フレーベルはこう述べている。真の認識は「理論的な概念」からではなく、「固有の事物－生活観察や生活体験」から生まれる。無味乾燥な書物による知識や概念的な知識に代わって「自らの観察による知識」や「体験知」が必要とされる(7) [安部] ならば、それは学校における通例の机上の学問に対抗しているので進歩した考え方である、と [デューイ]。さらにいっそう進歩的な特色は彼の哲学的世界観には新しいものに目を開き、古いものへの固執を妨げる教授学的要素が含まれていることである。1851年にフレーベルはこう書いている。

「永遠の精神的な創造と形成、調整と安定、それのみが生であり、かつ存在である」⁽⁸⁾

新興市民の要求－フレーベル自身も同じ要求を持っていたが－とは、さまざまな宗教の認識に対する寛容性への要求である。

教育の目標

フレーベルの教育は新興市民の関心を引いた。フレーベルが教育の目標とした人間とは、主導権を争うブルジョアジーの市民生活の理想形態であった [勝山]。

フレーベルの目的は、人間の本質の3つの方向を目指す人間の教育（訓育）と陶冶であった。3つの方向とは、「有用な実践性」と「すぐれた能力」を育て、「基本的知識」と「生きた、確かな宗教性」を理解させ、かくて個人として、また家庭、国家、共同体の一員としての生活要求を満たすことができるように、行動力、感情及び思考力を育てるというものであった⁽⁹⁾。こうした目標を達成するために、子どもたちは一人から集団へ、既知から未知へ、見える状態から見えない状態へと導かれるように教育方法を定められた。フレーベルの教育方法が典型的なのは子どもができるだけ行動し、自己発見できる働きかけであった。カイルハウで教えられた一人の報告によると、フレーベルの教育は「イエズス会の教育」と激しく対立していたので、彼は、イエズス会が教育によって多くの人々を少数の者の意のままにし、その支配下におくために、子どもたちの精神生活を抑圧するのが狙いだと理解した⁽¹⁰⁾。

カイルハウ校の教材

カイルハウ校では自然科学系の科目が教材の大部分を占めた。これに対して、古典語は少数科目に制約されていた。母語の授業も重視され、子どもたちにはしっかりした知識が教えられないうちは外国語は教えられなかった。

カイルハウでは「宗教」と同様に勧められた教科は体育であった。そこには明らかにペスタロッチとヤーン（ドイツ体育の父）の影響があった。地理にも多くの進歩的な特色は示されていた。カイルハウの近辺を観察するほか、遠足で地域のことを探求する。こうして、彼はチューリンゲン、ドイツ、ヨーロッパ、そして世界の観察に至るまで指導した。そのさい、児童生徒は厳密な地図の作成まで指導された。基礎的な自然科学（博物学、物理、化学、「技術」）の授業を導入することによって、同時にフレーベルは市民階級の要求に応じた。この学校では音楽も教えられた。カイルハウの学校のアーカイヴズには児童生徒のいろいろなすぐれた作品（図画）が保存されており、図画の授業がいかに見事なものであったかを証言している。14日もつづく夏休み中の旅行は、子どもたちに協働体験とならんでさまざまな領域にわたって豊かな知識を創造させた。体験と観察は旅行報告書を作り、絵を画くことにより確認された。活動（作業）は教育、とくに道德教育においては重要な役割を果たした。

ほとんどの実践的な行動は授業との生き生きとした関連性をもっていたが、同時に学校の経済的な存続に役立っていた（木の実集め、榎集め、学校の小さな所有地の管理、教室

の清掃、洋服の手入れ、そして売り物の手づくり)。フレーベルは教育の重要な手段としての遊びの意義を正当に評価した。体操の簡単な集団的な運動遊びから開放的な自然の中での組織的な子ども遊びに至るまで、カイルハウ校の生活には数多くの遊びが位置づけられていた。学校という機関－フレーベルの視点は一貫していた－は、まるで大きな家庭に似ていた。教師と子どもたちはお互いに親しく「君、あんた」と呼び合った。教師の妻はとりわけ家事を担っていたが、子どもたちに教育的な影響を与えた。学校を支配する家族主義的な精神がひととき目立った。子どもたちは解放戦争時代の進歩的なドイツの歌を大切にし、歌うようにと教えられた。子どもたちの中にはやがて 1848 年革命に積極的に参加した者も少なくないが、その遠因はカイルハウ校の教育にあった [豊泉]。

フレーベル自身は、教育によってのみドイツ統一が達成できるという意見を持っていたにもかかわらず、ドイツの分裂状態がつづくことが利益をもたらすと考える勢力に対抗する革命的な戦いの必要性を感じていなかった。

就学前教育改革に向けたフレーベルの努力

幼稚園運動の社会的要因

「幼稚園」がつくられた当時、ドイツにはすでに多くの就学前学校が存在していた。それらは、幼児学校、遊び学校、託児所、子守り学校と呼ばれた。この種の施設は、封建的な家族形態、すなわち家父長的な生産共同体の崩壊の中でつくられた。女性や年長の子どもたちを資本主義的生産過程に参入させていくためには幼児の段階から子どもたちを公私を問わず学校に入れなければならなかった。生産様式の転換がもたらす人間への要求のさまざまな変化は家族（家庭）や社会施設の教育の内容と形式の変化を必要とした。この時代の要求を自らをとりまく具体的現象の中で認識していたフレーベルは客観的な要因を究明することはできなかったにもかかわらず家庭教育、とくに教育的な遊具の普及に努めた。やがて彼は伝統や慣習にいつまでも固執することに挑戦しなければならないので、家庭における教育は基本的に変えなければならないと考えた。したがって彼は、新たな家庭教育を補助し、手本となるもの、とくに家庭における幼児の教育の手本として新しい教育施設の建設に取り組んだ。

就学前教育の理論と実践

すでに明らかに資本主義生産様式の初期段階に達していた時代において、コメニウス

(Kommensky) [1592 ~ 1678 年] は理性的な幼児教育の手引き書『母親学校の教師』を公けにした。18 世紀の最後の 10 年間にもっぱら就学前教育問題に取り組んだのは、とりわけ博愛主義者であった。フレーベルの理論にはドイツにおける新興市民階級の進歩的思想が見い出される。

フレーベルは、遊びとは、幼児の精神的、道徳的、及び身体的諸力の発達のための典型的で重要な手段であるという仮説から立論した。これは正しいことであった。したがって、彼は既存の遊び（の成り立ち）を研究したのみならず、多くの遊具と作業具を考案し、それらを完璧な遊びのしくみの中に位置づけた。

ディースターヴェーク (Diesterweg) は、1894 年、フレーベルの遊びの方法について次のように述べた。

「彼はまず球（ボール）で遊びを指導した。彼は、7 色の虹のもとで子どもたちに球を差し出す。次いで教育的で楽しい球による遊びがつづく。（その際大人は子どもたちを見ているだけでないといけない。）さらに立方体のもので遊び、円筒のものへとつづく。こうした遊びから子どもたちは何かを学ぶ。・・・しばらくして小さな棒で、また木切れで、そしてこれらに似た遊具で遊ぶ。すべての子どもたちは、こうした活動が多く的美的様式（美的形式）を表現し、きわめて簡単な基本的な考え方や概念を理解し、最も簡単な遊具のしくみをとおして生活の中で出会うあらゆる種類の対象（生活形式）（椅子、机、家、橋、そり、階段等）をどんな子どもたちももっている感覚力にしたがって表現する。とは言え、「幼稚園」の休み中の共同の遊び以外で起きていることや遊びをとおして気づいたことについてはおぼろげな情景しか目に浮かばない。すなわち、その教育とは子どもたちの自然にかなった自己活動による教育（陶冶と訓行く）であり、神が子どもたちに授けた身体、心、及び行動力の教育である⁽¹¹⁾」

フレーベルの生きた時代に、すでに部分的にはあれあまりにも厳格であった遊びの規制に対しては異論があった。彼の遊びの恩物の神秘的な解釈（「あらゆる」象徴化としてのボール遊びなど）は今日でも正当に否定されている。とは言え、多くの新しい遊具が子どもたちの集中力、身体的統制力、創造的ファンタジーの発達を援助するにふさわしいものとされていることは有意義なことである。

例えば、彼の幾面かの立方体は今使われている積木のはしりである。多くの円形の遊び、

指遊び、手細工や手作業ももともとはフレーベルに遡る。

フリードリッヒ・フレーベルは就学前の子どもたちに対して計画的に教育を行う教育者〔幼稚園教師〕の必要性を考えた先駆者の一人であり、模範的に、献身的にそれを貫いた〔倉橋〕。

フレーベルは自分の教育者としての努力について晩年（1848年）次の一言で自らを評価しているが、彼の実績の評価については彼の言葉以上でも以下でもない。

「私のすべての教育的行動を心底から吟味してほしい。私は、30年の間、共和国のために教育（訓育と陶冶）に取り組み、そして共和国を目指して共和国市民の美德を行動に移すために教育（陶冶と訓育）に取り組んでいる」⁽¹²⁾

注

- (1) 「マイニンゲン侯爵宛の書簡」『フリードリッヒ・フレーベル没後 100 年記念論文集』
（以下、論文集と略す。）（1952年7月21日）国民と学問・出版、1952年、51頁
- (2) 同上、106頁～
- (3) 同上、141頁
- (4) 同上、45頁
- (5) 同上、44頁
- (6) 同上、47頁
- (7) ベルリンの遺稿中の書簡による質問文書の一部（日付は1851年2月25日）
- (8) カイルハウの遺稿
- (9) 論文集、141頁
- (10) ユリウス・フレーベル、履歴書、第1巻、シュトットガルト、1890年、30頁
- (11) 論文集、148頁（ディースターヴェークが強調）

訳者注

- ・青木美智子「20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義的解釈をめぐって－遊具概念を中心に－」東京大学教育学研究科紀要第48巻、2008年
- ・安部貴洋「デューイのフレーベル解釈」八戸学院短期大学紀要第37号、2013年
- ・J. デューイ『学校と社会』（J. Dewey, *School and Society*, 1925）

- ・勝山吉章「フリードリッヒ・フレーベルと19世紀前半における小市民民主主義との結びつきについて」福岡大学人文論集第39巻第3号、2012年。市民革命期におけるフレーベルの旺盛な教員運動について紹介。
- ・豊島清浩「フレーベルにおける学校教育の構想に関する一考察」浦和短期大学紀要第1号、2013年。7～14歳児対象の国民教育施設と3～6歳の孤児のための保育・発達施設（1829年広告）は体系的、計画的な国民教育構想に基づいていた。
- ・倉橋惣三『倉橋惣三選集』第1巻、学術出版、2008年。倉橋は次のように述べている。フレーベルは、「神秘主義的なほどにロマンチックな瞑想に自分を投じている一方、自然界の人として事実に対する直視こそは非常に真率なものがあつた」（335～356頁）

総括的な所感

1、近代ドイツ教育（思想）を先導したフレーベルの教育史的意義

- ・学校教育の基礎としての家庭教育、幼稚園教育の延長としての学校教育の位置づけ
- ・恩物による遊びの活性化－子ども中心の教育へ（子どもを発達の主体に）－その道背力
- ・新教育を誘導しその先駆的役割をどう果たしたか（地域社会の観察やフィールドワークといった外界とのかかわり、遊びや作業や労作といった生活経験をベースとした発達観など）
- ・近代学校（ドイツ公教育－幼児段階から成人段階まで－）を思想的、実践的にどう準備したか
- ・近代国家（市民社会）の形成をいかに指向したか（ドイツ民族国家ではなくドイツ統一共和国家）

2、今後深めたい論点

- ・神性を中心に据えた人間形成思想の内奥と論理構成（宇宙論的世界観など）
- ・遊び・恩物の普遍性と時代的限界性
- ・合自然の教育観とキリスト教信仰（とくに敬虔主義信仰）
- ・ヴァイマル期における発展と消長（フレーベル主義教育論の進化と後退）
- ・近代教育思想史上の関係性（とくにルソーとデューイ）
- ・社会主義体制下でのフレーベル認識の特色（意義と限界）

Invitation to the Life and the Work of Friedrich Wilhelm August Fröbel

Shinkai, Hideyuki*

This is the translated article from Karl Güunter's "Geschichte der Erziehung in Deutschland (1967)" which includes many of Fröbel's educational ideas and works. Fröbel was originally born in the village of Oberweisbach in Preußen (Germany today) in 1782. His father was a clergyman of local evangelical church. After having worked as the manager for the forestry industry, he entered the faculty of Philosophy and National Sciences of Jena University as a student and eventually became a noted romantic nationalist. In 1805, Fröbel has met with Pestalozzi and he engaged himself in the "Heimschule" movement. This experience made him realize the mission as a teacher. He recognized the value of preschool education and named it "Kinder-Garten". He attached importance to "Play (Spielen)" and conceived "Gift (Gabe)" as the instrument of "Play". In some of his books, he described that "Joy" and "Life" are integrated through education of "Play". Fröbel recognized "Play" as the method for mental and physical capacity building. We believe it is important to note "Gift" creates the potentiality to develop fantastic valuable capacities of children. In summary, from the historical view point, we can witness the emergence of progressive ideas coming from the newly established social class called "citizen's class".

キーワード：遊び・恩物・ペスタロッチ・幼稚園・新興市民階級

**Emeritus President of Nagoya Ryujo Junior College*